

歯科衛生士口演

(B 会場)

5 月 19 日 (土) B 会場 9 : 00 ~ 9 : 50
15 : 00 ~ 16 : 00

B 会 場
衛 B-01 ~ 11



衛 B-01
9:00
2504

慢性歯周炎患者に対する包括的歯周矯正治療：10年経過の1症例

櫻井 ゆか

キーワード：慢性歯周炎，歯周基本治療，歯周矯正治療

【はじめに】不正咬合の改善を主訴として来科した慢性歯周炎症例に対して，歯周基本治療後に矯正治療を行い，歯周組織の著しい改善が得られ，初診より10年経過した症例を報告する。

【初診】2001年11月，54歳，女性 主訴：不正咬合の改善 口腔既往歴：49歳頃歯肉出血を自覚し，歯周基本治療を受けたが改善されず放置した。54歳頃矯正治療を希望し本学の成人矯正歯科へ来院した際，歯周治療の必要性を指摘され歯周病科へ来科した。

【診査・検査所見】全顎に辺縁歯肉の発赤がみられ，下顎前歯部の歯肉腫脹が顕著であった。プロービングデプス（PD）とクリニカルアタッチメントレベル（CAL）の平均は3.1mm，3.6mm，PD4mm以上は51部位，プロービング時の歯肉出血（BOP）は46%であった。初回のブラークコントロールレコード（PCR）は81%であった。

【診断】中等度慢性歯周炎，下顎前歯部叢生を伴う上顎前突

【治療経過】歯周基本治療を開始し，2003年に再評価を行い，歯周組織が安定したため，矯正治療を開始した。2009年にサポートイペリオドンタルセラピーへ移行した。2011年7月時，PDとCALの平均は2.5mm，3.1mm，PD4mm以上は1部位，BOPは21%，PCR20%以下と改善した。

【考察・まとめ】本症例では，歯周基本治療で歯周組織の炎症のコントロールをした後に，不正咬合の矯正治療を行うことで，効果的な口腔清掃が容易になり，安定した歯周組織を長期的に維持することが可能であった。

衛 B-03
9:20
2504

2型糖尿病の慢性歯周炎患者に歯周治療を行い改善が認められた一症例

山本 裕子

キーワード：糖尿病，慢性歯周炎，歯周基本治療

【はじめに】近年，糖尿病と歯周病の相互関係が提唱されている。今回，2型糖尿病の歯周病患者が，歯周基本治療を行ったことにより歯肉状態とHbA1cの値が改善した症例について報告する。

【初診】患者：53歳男性。初診日：2010年8月23日。主訴：右の顎の下が痛い。全身的既往歴：30代半ばより2型糖尿病，高血圧症，高脂血症。右下顎の痛みが始まった頃より食前血糖値が下がらなくなった。HbA1c 7.3。

【診査・検査所見】主訴の痛みは46の慢性化膿性根尖性歯周炎であった。全顎的に歯肉の発赤腫脹は顕著。PD4mm以上40.7%，BOP56.8%，PCR75.0%。X線所見にて35，36，37，46，47には垂直的骨吸収が認められた。36にはⅡ度の根分岐部病変が認められた。

【診断】広汎型中等度慢性歯周炎

【治療計画】①46根管治療 ②修復治療 ③歯周基本治療 ④再評価 ⑤補綴治療 ⑥SPT

【治療経過】2010年9月～11月：46根管治療。歯肉腫脹顕著なため適宜歯肉縁上のスクレーリングを行い，9月に簡単なTBIを行う。9月末7.7だったHbA1cが11月には7.0に改善した。2010年12月～2011年2月：歯周基本治療を行い，PD4mm以上3.1%，BOP0.0%，PCR9.3%に改善した。4月にはHbA1c 6.2に下がり，現在も6.7～6.2を維持している。

【考察・まとめ】本症例から，患者が口腔内に関心を持ち，歯周基本治療を行い歯肉の炎症を除去することにより，薬の量や種類の変更なく糖尿病の数値を改善・維持できることが示された。

衛 B-02
9:10
2504

歯列不正を伴う慢性歯周炎患者に対して近在矯正歯科医と大学病院との連携により対応した症例

加藤 万理

キーワード：慢性歯周炎，歯周基本治療，口腔清掃指導

【はじめに】歯列不正を主訴として来科した慢性歯周炎患者に対して，歯周病専門医と歯科衛生士とのチームアプローチによる12年の経過を報告する。

【初診】1999年7月，51歳男性 主訴：上顎前歯部の歯列不正口腔既往歴：40歳頃上顎前歯部の歯肉出血を放置したため，50歳頃歯列不正を自覚し，近在矯正歯科を受診後，本学歯周病科を紹介された。

【検査所見】全顎的に歯肉の発赤，腫脹がみられた。プロービングデプス（PD）とクリニカルアタッチメントレベル（CAL）は4.0mm，4.3mm，PD4mm以上は87部位，プロービング時の歯肉出血（BOP）は64%であった。初回のブラークコントロールレコード（PCR）は70%であった。

【診断】中等度の広汎型慢性歯周炎

【治療経過】歯周基本治療時，口腔衛生指導，咬合調整，全顎にわたりSRPを行い，並行して矯正治療を開始した。口腔衛生指導では，歯間ブラシ使用法を是正し，タフトブラシを加えることにより，PCRは30%前後まで低下した。2004年に動的矯正治療が終了し再評価を行い，2006年にサポートイペリオドンタルセラピーへ移行した。現在まで，2～3か月毎に口腔衛生指導を行い，2011年，PDとCALは2.7mm，3.7mm，PD4mm以上は6部位，BOPは22%と改善し，PCRは10%以下と安定している。

【考察・まとめ】本症例では，歯科衛生士のセルフケアの支援と，患者の矯正治療を行いたいという意思で，モチベーションが長期的に維持でき，安定したPCRと歯周組織の改善が認められた。

衛 B-04
9:30
2504

根分岐部病変の術後経過

佐藤 ゆかり

キーワード：根分岐部病変，歯周基本治療，SPT

【はじめに】根分岐部病変は進行とともに歯周基本治療では治癒ににくいことから初期の段階でアプローチすることは非常に重要である。早期発見，治療により進行を防ぐことができた症例の結果を報告する。

【初診】患者52歳男性。初診日：2006年8月21日。主訴：1年前から歯肉出血が続いている。

【診査・検査所見】現症：全顎的に歯肉の発赤，腫脹が認められ歯肉縁上縁下ともに多量の歯石が沈着。Probing depthは一部5mmを超える所が存在しBOP58%，PCR90%。X線所見：全顎的に水平性骨吸収が認められ，一部分岐部病変が認められた。全身既往歴：特記事項なし。喫煙歴：10年前に禁煙。

【診断】広汎型中等度慢性歯周炎

【治療計画】1）歯周基本治療：口腔衛生指導，スクレーリング・ルートプレーニング2）再評価3）SPT

【治療経過】2006年8月：患者の職業は内科医，歯科受診の経験がないためモチベーションに配慮しながら口腔衛生指導を開始した。9月：ルートプレーニング開始。46の根分岐部病変Ⅰ度に対しルートプレーニングとブラークコントロールで経過観察をおこなった。2007年1月：再評価。Probing depthは4mm以内，BOP6%よりSPTへ移行した。

【考察・まとめ】46の根分岐部病変はルートプレーニング，ブラークコントロールで改善した。通常根分岐部病変のSPTは非常に難しく容易に再発するため，今回の適切な処置による改善は患者にとってもセルフケアしやすく良い結果となった。

衛 B-05
9:40
3002

高齢者におけるメインテナンスの在り方

遠藤 直子

キーワード：炎症のコントロール、インプラント、
コミュニケーション、口腔機能

【はじめに】菌周治療終了後、メインテナンスへ移行し、継続的に来院して頂くことはとても大切と考えています。今回は長期的なメインテナンスの中で、炎症のコントロールだけではなく、年齢と共に衰えてくる口腔機能にも着目した症例について報告させていただきます。

【初診】初診日：2006年1月12日 患者：70歳 女性

主訴：歯ぐきから出血、歯ぐきが痛い 既往歴：糖尿病、高血圧

現病歴：1ヶ月前からの歯肉出血と痛み

【診査・検査所見】

口腔内所見：歯肉の発赤や腫脹、歯石沈着が認められる。

X線 所見：全体的に水平的骨吸収、一部に垂直的骨欠損

【診断】慢性歯周炎

【治療計画】菌周初期治療による炎症のコントロールとインプラントを含む補綴により咬合の安定を図る

【治療経過】2006年1月～ブラークコントロール及びスケーリング・ルートプレーニング。併行してカリエス及び補綴・インプラント治療。2007年11月～再評価・メインテナンスへ移行

【考察・まとめ】今までは、歯肉の変化ばかりに着目していましたが、最近では、メインテナンスの中で、歯肉だけではなく種々の口腔機能に現れる変化も診ていく必要があると思うようになりました。今後は患者さんとのコミュニケーションを大事にしながら、より注意深く口腔内を観察、対応して、患者さんのQOLに貢献したいと考えています。

衛 B-07
15:10
2504

ブラークコントロールの改善に影響を及ぼす因子
の検討

森川 紗里

キーワード：ブラークコントロール PC 歯肉出血 PCR

【目的】臨床においてブラークコントロール（以下PC）の確立がスムーズにいく患者とうまく進まない患者がある。我々は、これらに患者の性別や性格、担当する歯科衛生士の力量などが関係しているのではないかと考えた。今回、当センター歯周病科にて治療を行った30名の患者を対象として、それぞれの患者の清掃指導後のPCの改善度と患者の各種特徴を比較検討した。

【材料および方法】PCの改善度の判定にはオレリーの4面法によるPlaque Control Record（以下PCR）値を用いた。指導前後のPCR値から清掃指導による効果を改善率として算出して判定値とした。検討した患者の特徴項目は、男女差、年齢差、指導衛生士の経験年数、初診時の主訴、アポイントの時間を守るか否か、歯間ブラシの使用経験の有無、の6項目で比較検定にはMann-Whitney U-testを用い、有意水準は5%とした。

【結果および考察】女性の方が男性よりも有意に改善率がよかった（ $P<0.01$ ）。年齢との関連では、30～40歳代と50～60歳代で比較したが、年齢による有意差は見られなかった。指導した衛生士の経験年数では有意差は見られなかった。初診時の主訴が歯周病に関係するか否かでは有意差は見られなかった。予約に遅れないグループの方が有意にPCの改善率はよかった（ $P<0.05$ ）。歯間ブラシの使用経験がある方が有意にPCの改善率がよかった（ $P<0.01$ ）。PCの確立のしやすさに、患者のいくつかの要素が関連している事が明らかとなった。女性で予約時間にも遅れずに来院し、歯間ブラシを使った事がある患者はPCの確立が行いやすいと推察された。特に歯間ブラシの使用はPCの確立に重要な因子と考えられた。

衛 B-06
15:00
2504

ブラークコントロールの改善が困難な患者への対応についての検討

吉川 沙絵

キーワード：ブラークコントロール 改善困難 PCR PC

【目的】歯周病の治療を進めて行く上でブラークコントロール（以下Plaque Control：PC）の確立は重要であるが、臨床現場ではPCの確立がスムーズに進まない場合がある。今回、当センター歯周病科の患者で、指導による口腔清掃状態の改善に時間がかかった患者の治療経過から、PCの確立が特に困難な患者への対応について検討した。

【材料および方法】当センター歯周病科で治療を行った患者で、PCの確立が特に困難であった10名の患者（平均年齢は51.2歳、男性5名、女性5名）を対象とした。PCの確立の判定にはオレリーの4面法によるPlaque Control Record（以下PCR）の検査を用いた。そしてPCR値が20%以下に達した時点をPCが確立した時期と判断した。PCの確立までに4回以上の指導期間が必要であった患者をPCの確立が困難な患者とし、それら10名の患者の初診時、PC確立時、メインテナンス開始時（治療終了時）のPCR値について検討した。

【結果および考察】10名のPC確立までに要した指導回数は平均5.0回で最も指導回数を要した患者は7回であった。また10名全員がPCR値が20%以下に達しPCの確立が可能であった。しかし10名中6名は、メインテナンス開始時には一旦確立したPCRが20%以上に戻っていた。

今回の結果から、PCの確立が困難な患者でも時間をかけて指導することでPCの確立は可能であると考えられた。しかし一旦確立したPCも治療後に元に戻ってしまう事も予想され、そのため治療後もブラークの付着のチェックや清掃指導は注意深く行う必要があると考えられた。

衛 B-08
15:20
2302

歯間ブラシ技術評価表の臨床適応

山下 純子

キーワード：ブラークコントロール、歯間ブラシ、歯周基本治療

【目的】日常臨床では、歯間部清掃に有効な歯間ブラシ（IDB）の操作方法やその適否等を客観的に評価する手段がない。そこで、IDBの技術評価表を試案し臨床適用した。

【方法】対象は、愛知学院大学歯学部附属病院歯周病科の歯周病患者25名（男性10名、女性15名、53±13歳）で、現在歯数26±2歯、プロービング深さ4mm以上の歯数の比率59±36%、ブラークスコア（PCR）42±28%であった。同患者の口腔清掃指導時毎に、PCRと同時に、技術評価表を用いた。なお、技術評価表は、IDBを全く使用していないレベル1から、毎日使用していないレベル2、毎日使用することが定着したレベル3、定着したが不適切な使用をレベル4～6、適切に使用できるレベル7に分け、サブクラスとして、毛束の消耗パターンを不適切な消耗Cから、適切な消耗Aに分け、記号化して、治療毎に記載するものである。

【考察】初回の口腔清掃指導時、レベル1：15名、レベル3：3名、レベル4：2名、レベル5：2名、レベル6：1名であった。その後、初回レベル1の15名がレベル3以上になった指導回数は、2回1名、3回4名、5回4名、6回1名、7回2名、10回以上4名となった。また、レベル3以上の10名もその後の推移が明確に把握できた。したがって、技術評価表を用いることで技術の習熟度を把握し、かつ、経時的にも評価でき、臨床適用できる可能性が示唆された。さらに、適切な目標設定を患者に呈示することにより、モチベーションの向上につながり、同時に、歯科衛生士側の指導の共通指標として有用と思われた。

衛 B-09
15:30
2398

実践的卒後研修の有用性の検討 第1報
取り組みの紹介

佐藤 昌美

キーワード：卒後研修，歯周治療，インスツルメンテーション
【目的】歯科衛生士は歯科医療チームの構成員として，患者中心の包括的歯科治療の一旦を担う。そのため，卒後教育として歯周治療技術を向上するための様々な卒後研修が開催されている。しかし，研修後の参加者の変化を具体的に報告する研究は少ない。そこで，卒後教育の実習研修の有用性を明らかにすることを目的として，質問紙調査とキュレットスケーラー操作の上達度を指標にした検討を，某歯科医院で開催した実践的医院研修会において行ったので報告する。
【材料および方法】対象は，開業歯科医院勤務の歯科衛生士13名で，研修会内容は，日本歯周病学会認定歯科衛生士資格を有する歯科衛生士によるシャープニングとインスツルメンテーションに関する講義，マニキュア除去実習を実施した。キュレットスケーラー操作の上達度は，研修会前後で評価用模型から指定範囲のマニキュアを除去する時間で評価した。質問紙調査では，自由回答形式で研修内容の満足度などを調査した。統計分析にはStudentのpaired-ttestを用いた。
【結果および考察】指定範囲のマニキュア除去に要した時間は，研修前 83.5 ± 22.3 秒，研修後 44.4 ± 13.2 秒で有意な差があった（ $p < 0.001$ ）。また，質問紙調査では，シャープニング，ポジショニングを含む基本的内容が卒後問題と感じた項目として挙げられ，全員が実践的な研修会の内容に満足していた。感想として「自分自身のモチベーションが上がりました」，「シャープニングが上達した実感を得ることができました」などがあつた。この結果は卒後研修の有用性を示唆し，さらに，研修会が参加者の主観と行動にどのような影響を与えるのかを調査する必要があると思われる。

衛 B-11
15:50
2402

心臓血管外科疾患周術期患者の口腔衛生管理に関する統計学的解析

木崎 久美子

キーワード：心臓血管外科，周術期，口腔衛生管理
【目的】歯周病は，冠動脈疾患を含む動脈硬化性疾患に対して負の影響を及ぼす。これらのことを念頭において，兵庫医科大学病院歯科口腔外科は，心臓血管外科外来から依頼を受け初期治療を中心とした歯周病治療，さらには口腔衛生管理を行っている。本研究は，周術期および外来管理期の心臓血管外科手術受診患者を対象とした口腔衛生管理システムを確立するために，兵庫医科大学病院心臓血管外科受診患者（以後，心外患者）の口腔衛生状態に関する現状を把握すること，さらには歯周初期治療を心臓血管外科手術の術前に行うことが，術後の口腔衛生管理にどのような影響を及ぼすか評価することを目的とした。
【材料及び方法】心外患者の歯周組織の状態を調べ，口腔衛生管理が既に確立している血液内科入院中の造血幹細胞移植患者（以後，血内患者）を対照として，両者間での口腔衛生状態の違いを比較した。また歯周初期治療を行い，その術前術後の口腔内および全身状態の評価を様々な臨床パラメータをもとに比較した。
【結果および考察】心外患者は，血内患者に比較して，すべての臨床パラメータにおいて不良であった。また歯周初期治療を心臓血管外科手術前に行った患者の術後回復期における口腔内および全身状態は良好であった。以上の結果は，心臓血管外科手術を受ける患者に対して口腔衛生管理システムを確立することの重要性を示す結果であると考えられる。今後，担当医師・看護師等のコメディカル・スタッフに対して，周術期の口腔衛生管理の重要性についての啓蒙活動を行うことを計画中である。

衛 B-10
15:40
2398

実践的卒後研修の有用性の検討 第2報
質問紙調査からの検討

原 久美子

キーワード：実践的卒後研修，VAS，行動の意思決定理論
【目的】我々は，第1報で開業歯科医院勤務の歯科衛生士を対象とした，シャープニングとインスツルメンテーションに関する実践的医院研修会の取り組みを報告した。第2報では，本研修会時に行った質問紙調査を基に，研修会の成果と参加者の主観や行動へ与える影響などから実践的卒後研修の有用性を検討したので報告する。
【材料および方法】対象は研修会に参加した開業歯科医院勤務の歯科衛生士13名で，主観や行動へ与える影響について質問紙調査を行った。調査内容は，①歯周治療に関するインスツルメンテーション技術や知識の主観的評価9項目について，VAS法を用い研修会前後で比較した。次に，②今回の研修会が，将来続けて研修会に参加するという行動につながるかどうかを，「行動の意思決定理論」に基づいた質問紙を作成し，研修会後に実施，検討した。質問紙は連結匿名化し集団処理をした。統計分析は，Studentのpaired-ttest，Spearmanの順位相関係数を用いた。
【結果と考察】①歯周治療に関するインスツルメンテーション技術や知識のVAS値は，全項目において研修前に比べ研修後が有意に増加した。②行動の意思決定理論に基づいた質問紙では，「下位概念」，「行動までの段階」，「行動を取ろうとする意図」，「行動」の全てのステップ間に相関がみられた。特に「結果に対する確信・評価」と「行動に対する態度」との関連（ $r = 0.82$ ），「行動をとろうとする意図」と「行動」との関連（ $r = 0.62$ ）に強い相関がみられた。これにより，実習を取入れた本研修会は，歯周治療のインスツルメンテーション技術と主観的な評価を向上させ，「今後も研修会に参加したいという」行動意思につながり，有用性が伺えた。